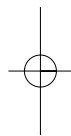


月に駆られて
—六条御息所物語—

杉本圭



「夢」の訪れ

6

絹の牢獄

21

生贄の系譜

32

禁じられた女

44

子育ては落日の彼方に

54

しのび音

59

夏の嵐、そして禁忌

75

西施の愛人

81

太初の職業

97

雅な生き霊

124

悪魔の首に鈴を

138

身代わりの人形

152

木の葉の言い訳

165

冬の日の小さな陽だまり

186

鏡の沈黙

209

月の行方を

225

優秀な雌鳥

249

女であること、玩具であること

262

祭りのあとは

269

芥子の香に目覚めて

293

歌に詠めぬ心

318

「夢」の清算

333

あとがき

348

【六条】六条御息所……語り手であり主人公。幼くして入内し姫宮をもうけるが、夫宮に死別して寡婦となる。美しく教養にあふれる女性だが、もって生まれた情欲の深さと、高いプライドが災いして社会に適合しない。源氏の君との出会いが生涯の十字架となる。

中将の君……六条御息所の乳母子。現実的、合理的な開放された精神を持ち、卓抜な実務能力で御息所を支え続ける。

【二条院】桐壺更衣……嫉妬に燃える弘徽殿女御の苛酷な仕打ちに耐えかね、源氏の君を生んだのち、はかない生涯を閉じる。

源氏の君……桐壺帝の御子として生まれるが、政治的背景がないため、親王（宮）にはなれず源氏（臣籍降下）とされ、三条左大臣家に降嫁させられる。光り輝く美貌から「光源氏」とあだ名されるが、幼い頃から、常に賛美と冷遇という分裂した待遇に心を引き裂かれて、円満な成長を阻まれる。

むらさきの姫君……幼くして母に死に別れ、継母から疎まれて北山の祖母の元で養育される。藤壺女御と叔母姪の関係で、瓜二つだったために、源氏の君のもとに引き取られることとなる。源氏の君によって「理想の女性」となるよう育てられるが、「家なき姫君」であるために、北の方（正妻）の地位を得ることができない。

惟光……源氏の君の乳母子。神秘的な主人に忠実に仕える如才なく有能な家司（執事）。

【三条左大臣家】左大臣……藤原摂関家の氏の長者。温厚篤実な人柄から、外甥である桐壺帝の信頼がもつとも厚く、権勢の頂点に立つが、娘運に恵まれず権力基盤がないために生涯政界の調整役に徹しきる苦勞人。

頭中将……左大臣の長男。明朗快活な公達（貴公子）で、二歳年下の義兄源氏の君を慕い、終始対抗心を燃やす。

三条の姫君……もって生まれた不幸な才質のゆえに、摂関家の長女でありながらも入内せず、源氏の君の添隊（正妻）となり、一男をもうけるが、非業の死を遂げる。義祭の車争いで、六条御息所から恨みを買ひ、御息所の生き霊に取り殺されたとされる。

【二条右大臣家】

右大臣……藤原摂関家の本流ではなく、時運にのつてのしあがってきた新興勢力の頭主。娘弘徽殿女御の産んだ、桐壺帝の二宮（長男）が春宮（皇太子）となることで、将来、帝の外祖父となることが約束されている実力者だが、軽率な行動性が災いして桐壺帝に不信感を抱かれ、左大臣に代わって氏の長者とすることができない野心家。

弘徽殿女御……右大臣の大君（長女）として入内し、弘徽殿を直廬（公邸）として与えられた女御。夫桐壺帝への愛情をないがしろにし、対抗勢力つぶしに専念してきた結果、中宮（皇后）になることも叶わなかったが、夫の死後、息子である朱雀帝が即位することで、太后となり栄華を極める。

【朱雀系皇室】

桐壺帝……朱雀院の二宮として生まれ、政治的に不安定な春宮時代を経た末、即位する。桐壺更衣を寵愛し、桐壺に入りびたつたことからこう呼ばれる。若き日の悲恋によって最愛の人桐壺更衣を亡くしてからは、したたかな政治感覚を持った策謀家となり、二条三条の両勢力を拮抗させることで自身の権力を不動のものとする。

朱雀院……息子桐壺帝の権力の最盛期に六十の賀を迎えるまでの長寿にめぐまれた。若い頃は埋もれ木の親王で、帝の地位にあった期間も短く、すぐに、故冷泉帝や六条御息所の祖父によって先帝に讓位させられたことが推察される。

【冷泉派皇室】

藤壺女御……先帝の四の宮。従姉妹である桐壺女御に似ているという評判から入内し、桐壺帝の寵愛を受け、ついには中宮（皇后）となる。禁じられた愛に燃える源氏の君の求愛を拒みきれず、不義の子をなすが、その皇子が後に春宮となる。

「夢」の訪れ

北向きの小さな曹子（私室）である。文机の上には書物と文反故がうずたかく積まれており、私は無心に書き物をしている。しかし私の視点はそこには、ない。文机に向かっている自分を、天井のあたりから、眺めているのである。見られているという意識のない自分の表情を見るのは不気味である。先を払う「おしおし」という声が響き、誰かが帰ってきたのだという想念に襲われる。かといって、その人物を、私は知らない。ただ、早く戻らなければという焦りだけがある。けれども、自分は、遠い。

そういう夢を見た。その曹子は夢によく出てくるのだが、どこなのか、知らない。私は、記憶にない場所も、見知らぬ人も、よく夢に見る。自分を眺めている夢というのも珍しくない。自分の寝顔や後ろ姿を知っているというのはよいものではない。合わせ鏡を縁起が悪いとした昔の人は賢明だったと思う。久しぶりに見たこの夢を不吉だと思った。凶兆を知らせる、夢告げだったのかもしれない。

その文は突然来た。予告もなければ、下相談もなかった。

本来、私のような立場の女にこんな文が来ること自体、あつてはならないことであった。しかし実際にはしばしば来る。たいていは中将の君がうまく取りはからってくれて、私のところまで達することはない。それがうやうやしくさざげ持たれて、この女によって届けられた。しかも普段ならば廊のあたりからやかましく喋り散らすこの女が、この日に限つ

ても何も言わない。黙って唐渡りの土人形のようにかしまっている。

文は枯葉色の薄様で小さく結ばれている。結び目が固くてほどくのに手間取った。きっとこの女は中身を見たに違いない。そう気が付いてにらみつけると、中将の君は同じ姿勢で同じ笑顔で座っている。山のような膝の上に重ねられた手が福々しい。手首など赤子のようにくびれている。しこたまかせぎがあったことは、ほぼ間違いない。

「そなたにとっては招福の文のようですね」

そう言つてやると、一瞬とほけた顔になった。口が、木のうるのうのように大きく開き、まばたきもしない。この女は返事に困るところという抜けきつた顔をする。

「それにしても結び目の固いこと。あぶら性なのかしら」

皮肉を言つても一向に動じない。「きつと固い縁で結ばれているのでございましょう」などとうそぶく始末である。

大人びて書いてあるが、明らかに筆跡が幼い。自分が早熟であつただけによくわかるのだが、散らし書きを早く卒業しすぎた者の字である。書体は端麗である。それを慎みと心得てか古歌をそのまま用いている。歌は、不思議なことに覚えていない。中将の君に誰が受け取ったのか問いたですと、古くからの女房の子で十三、四の子どもである。あの子がもはやそのような……と考えて、思わず文を落とした。

ようやく気付いたのである。

これが源氏の君から送られたはじめての文であつた。

「私はいくつになりましたか」

私は少し取り乱していたのかもしれない。中将の君に、自分の年を尋ねてしまった。「さて、十四、五でございましょうか」

こういうところがこの女の意地の悪さである。乳母子として同じ乳で育った以上、私と中将の君は同い年である。素直な女ならば「二十二」と即答するし、気のきいた者ならば「源氏の君のお年ですか」と問い返す。この頭の回転の速い女はそれを一気に片付けるのである。二十歳を超えた女など結婚するにはとうが立っている、不似合い、不釣り合いと改めて指摘されたように感じて、私は機嫌が悪くなった。

「こんな二十歳をとくに過ぎた、忘れられた女に何の所望ですか」

中将の君は、紅葉の合わせ色の扇でなかば顔を隠し（とはいうものの、扇が小さく見えるのだが）、「殿方はとかく雅な浮き名をお望みになるものでございますよ」と小賢しく答えた。

縁は、なくもない。源氏の君の母桐壺更衣は私の従姉妹にあたる。しかも今上帝の御子の中で、祖父の血を引く者はこの君だけである。祖父が生きておればなんとでも春宮（皇太子）にと考えたに違いない。それが臣籍に下り源氏となった。私としても決して無関心であったわけではない。

ただ、気楽に接触が叶うような立場ではなかった。私が、ではなく、源氏の君が、である。正直なところ、十数年よく無事で生きてこられたと感心している。病死、事故死どころか、屋内で雷に打たれて死んだとしても誰も不思議には思わなかったであろう。その点、私は気楽であった。父を亡くし、夫宮に先立たれて過去の人間となることで、自由と安寧を得た。夫宮の落とし胤が娘であったことも幸いして、私は気ままな寡婦暮らしをしていられる。相続した荘園の券なども、増えこそしないものの減ることはない。また今上桐壺帝をはじめ、三条左大臣、二条右大臣など、今をときめく人々が、一様にこの六条殿に感じてくれる一種の後ろめたさのおかげで、私の暮らし向きは都の誰よりも裕福である。

私はその富を用いて、六条殿を思い切って大改修した。実務の用向きがなくなった以上、楽しみだけを眼目にした館にしようと思いついたのである。祖父が、政治向きの必要から建て増しを重ねた寝殿、各対（別殿）は思い切って縮小した。もはやこの邸で公卿百官を招く大饗や臨時客の宴はない。東の対を娘宮のために小さく改築し、北西対を中将の君の政所とした。家政はすべてここでとり行うことにし、それに応じて家司（執事）や隨身所（警備員詰め所）も北側にまとめた。秋の夕暮れを楽しめるように、西の対は自分のために数奇を凝らし、少し南西に離れたところにあった亡き夫宮との思い出の家は、文庫として私がこもる場所とした。池も中島を三つにして唐橋を渡し、釣殿も女が使えるように工夫させた。そのくせ築地塀などは「物語がなくて殺風景」にならないように、わざと崩れた部分を残しておいた。女房や使用人の数も思い切って減らした。中将の君は例外として、美しくて教養のある者ばかりを残した。しかしこの結果は思いも寄らぬものとなった。権

門勢家の贅美に飽いた色好みばかりが、砂糖にたかる蟻のように集まってきたのである。そういう趣向が珍しかったために噂が自然に広まったのか、それとも、今、扇で隠しつつ鼻毛を抜いているこの色黒女が噂を広めたのか、そのところはよくわからない。不思議なもので、実体のない噂というものが、どういうわけかこの都では収入を生む。ともあれこの六条の政治的廢墟が、逆説的な意味で、雅の殿堂として一目置かれるようになったのはおおむねこの女の才覚である。

例の文が届くまで、ここにはうららかな春の午後のような時間が流れていた。元来落着きのない私も、穏やかな日々になじんだ。苦痛とその克服の連続にすぎない人生というものにも、たまにはそんな休息が訪れる。退屈することもなかった。若い女房たちには当然それぞれの物語があり、場合によっては私が首をつっこむ機会も得られた。若い女の涙は美しい。一定の距離さえ置けば、喜怒哀楽すべてが美しい旋律を奏でる。そう思えるほどに私の心は明澄であった。

しかしあの文が来たのである。拒むことも、できた。しかし魔性ましよウというものは、とかく人に魅入るものである。私は受け入れることを決意した。選んだのではなかったように思える。そうなることが決まっています、そうすることを私は知っていたのである。

その夜来訪という当日、朝から邸内はごった返していた。中将の君が陣頭に立って饗応の支度に大わらわであった。この女は、こと自分のことでない限り、実に雅な演出を心得ている。目にしか脳が宿っていないような女である。

そして夜が来た。昼の喧噪とは打って変わり、虫の声だけが六条殿を包み込んでいた。あとは、それが女の本業なのだが、待つだけである。私は久しぶりに、待つ女の切なさを演じてみた。鏡の中にはちゃんと「夜の女」が、いた。長らく忘れていた、それも人一倍激しい頬の火照りがよみがえってきた。

そんな高まりをぶち壊してくれるのが、常に、例の、趣味のよい、頭の切れる、下品で野蠻な中将の君の、自制心のない声である。

「寢殿の夜御殿では大げさでございますし、まさか正式の婚儀というわけにも参りませぬ（当たり前だ）。東面に御寝あそばしますように。格子を少し開けておきますから、十六夜の月明かりで源氏の君のお顔もご覧になれるかと存じます。（私の顔まで見えるではないか）当然御息所様のお顔があらわにならないよう、立て障子をご用意いたしますからご安心ください。（行き届いたこと）車寄せから東面まで、灯火は近からず遠からず、暗からず明るからず、並べてございます。（正式ではないのだから）。向こうの隨身みづみに篝火かきりびなど用意させたのではあるまいな）ほほ、趣向でございます。源氏の君のお歩みに合わせて順次灯火がつくように子どもを配置いたしました。灯火が君をご案内申し上げるといふ段取りになっております。（よくまあそんなことまで……）」

到着は夜半過ぎとなった。東門から御車通過という連絡が入り、闇の中を緊張が走り抜けていった。殿方にとってはお微行しほにすぎないものでも女方では重大事となる。車寄せから報告があった。間遠しさがつのってきた。しばしの後にくる戸が開く音がした。月影

が御張台（寝台）の脇をなめた。

十六夜の月を背にして、光り輝く一人の少年が立っていた。

少年は戸を閉めない。元よりそういう習慣のない少年である。夢の中のように距離が縮まり、気がつけば香ばしく焚きしめた匂いやかな少年の身体が傍らに来ていた。

「御仏の国を訪れたように御灯火が案内をしてくれました」

月明かりに照らされて、少年の華奢な胸の彼方にその顔がくつきりと映し出された。確かにこのような整った顔立ちには、まず現世ではお目にかかることはあるまいと茫然とした。数学的と言えるまでにその顔は一切の個性を拒んでいた。が、なぜこんなにも私は見ることができるのか。自分の溺れやすい習性からして不思議に思った。嫌いなのか。ふとそんな勝利感にも似たいぶかしさをかみしめていると、絹の氾濫が始まった。女の衣装は常時十枚を欠くことはないが、脱ぐのは意外に容易である。男の衣装は案内手間がかかる。女はその象嵌された仏像のような小さな時間差に男の情熱を見て取るものである。すべてが模範的と言えた。やはり噂のとおりこの少年はただものではない。古式に則って私はしなだれかかった。

しかしそこから奇妙なのである。肌と肌とが密着し無秩序な感触の連鎖が始まるとともに、時間が止まらなければならない。その後は女のたしなみとして、ただ音楽であればよいはずなのである。ところが私の素足に少年の震えが伝わってきた。私の時間は急に動きはじめた。覚醒が必要となった。そして最初に認識したのは、男の煮えたぎるような情

熱があるべきところがないということであった。私は、さすがにうるたえはしなかったが、女ひととおりの心得として、手助けの必要を確認しようとした。無駄であった。少年はその気高い顔には不似合いな卑屈を演じはじめた。私はすべてを理解した。

暁（夜明け前）にはまだまだという刻限であったが、私は夜膳の用意を急がせた。気づきまわりを解消する必要があった。少年の端麗な横顔が清らかな禁止に守られている。放っておくわけにはいかなかった。遠回しに聞いてやると、意外にすらりと「未だならわぬこと（童貞）」と告白した。二、三年前に元服している以上、これは不可解であった。元服と同時に男は「添臥（正妻）」を与えられて童貞を解く。源氏の君には三条左大臣家の姫君という立派な添臥がいるはずである。私は、例の悪い癖で、好奇心の塊と化したのが、必死にその衝動を抑えつけた。不用意に扱うことは許されない。

「明夜はそのつもりでお迎えいたします」

私はきっぱりと言ったのけた。男は三日間通うしきたりになっている。源氏の君が不首尾を気に病んで来なくなることを、私は一番恐れていた。傷つけないこと、掘り起こさないこと、そして何らかの希望を暗示してみせること。対策はそれに尽きた。

立ち去って行く源氏の君の後ろ姿は、まだ年齢相応に華奢であった。今にして思うと、私は見てはならないものを見たのかもしれない。

これが私の最初の決定的な悔恨となった。出会いが早すぎたのである。この少年の最大の不幸は、その神話的な生まれつきにあった。美しすぎる王子として宮中の寵愛を一身に

浴びて育った拳句に源氏とされた。君にとつては、家庭の喪失というよりも樂園追放と言

った方がふさわしいほどの衝撃であったに相違ない。持つて生まれた美質と不幸とその二つに引き裂かれた少年の自意識は、勢い自尊心を天空の高みにまで引き上げざるをえなかったたのであろう。何をやっても抜きん出た神童であったに相違ない。そうでないとかわいそうなこの少年は一日たりとも生きられない。その逆は成り立たないが、努力の動機は欠乏につきる。しかし世の中には、誰でも当たり前に持っているのに、努力では決して手に入らないものもある。

明くる日の夜、薄気味の悪いことに前夜とは一切異なった準備がなされていた。お迎えするところは、私がいつも居間に用いている西の対に変更された。灯火の趣向などなく、あくまでお微行で、一切人の気配がなくて普段どおりという点に注意が払われていた。

もつとも私の不安はそれで解消されるものではなかった。私には添臥の経験がないのである。入内したのは十歳のときだったが、夫宮にはすでに北の方があってその人が若くして亡くなったのがきつかけであった。そのため数年間は子どもが春宮御所で遊んでいるのと変わらないような毎日で、実質的にお仕えしたのは十四の春からである。夫宮は優しく私はただそれに身をゆだねるだけで事が済んだ。しかし今度はそうはいかなかった。

ちゃんと格子を閉ざし、闇夜で源氏の君を迎えた。それが私の体の核に淫蕩の灯をともしたのかもしれない。男を抱くという行為はおつに新鮮であった。男君の脱衣も手伝わねばならず、見えないだけに苦労したのだが、源氏の君は素直に従った。事は緩慢に進んだ。

やはり震えているようなので、それがおさまるまでしばらくの間抱きしめていた。それから、何ら成算があるわけでもなく、ただ体を寄せ、手を引いて導いた。反応はなかった。あれこれと試みるうちに、私の体の底から羞恥心が湧き上がってきた。

「恥ずかしゆうございます」

ついそう口にしてしまった、そのときであった。異変が起きた。抱き上げた猫のしっぽが左右に揺れて打ちつけられるような、そんな感じがした。同時に源氏の君の態度が一変した。打ちつける荒波のようであった。

暁の別れも昨夜とは違っていた。堂々とした風情が備わったのである。気のせいかな噂の光の放射をその後ろ姿に見た。

三夜目はさらに打ち解けた感じになった。暁の御膳に酒肴を用意したが、前二夜とは違って、源氏の君は何もかも平らげた。私は若い男の健啖ぶりが好きである。野卑を装った雅をそこに感じる。きつと生まれつきの私の情欲の深さゆえのことであろう。

食後源氏の君はかなり率直に感謝の言葉を口にした。私はこの機に乗じて聞きたいことを尋ねた。男君が帰らなくてはならない東雲にはかなり間があった。(おおむね源氏の逢瀬は短いのである)

知りたいの言うまでもなく左大臣の姫君のことである。本来その女が果たすべき役割を私が奪ったことは明白であった。

「まあ、絵に描いた」源氏の君は少しほそほそと続けて「ような姫君です」と締めくくっ

てしまった。私は遠慮なく聞き返した。ほそぼそが「餅の」と聞こえたからである。

「絵に描いた、餅では、お召し上がりになることはかたがたありませんね」

源氏の君は黙って笑った。笑顔がしみ通るように涼しげであった。

源氏の君の元服は、まばゆいまでに豪勢に執り行われたそうである。しかしその場所は兄春宮が紫宸殿であつたのに対し、清涼殿であつた。つまり桐壺帝にとって私的な儀式だという一線が引かれたのである。しかも親王になるのではなく、源氏である。もはや帝を父と思つてはならない、内裏を我が物顔に遊び歩くわけにはいかない。そう思うとやるせなげで涙をもよおしそうになつたという。しかし儀式は厳かに進み、引き入れ（元服時冠を被せる役）を最高実力者である三条左大臣が務めるといふ、春宮の母弘徽殿女御を鼻白ませるほど手厚いものであつた。しかも元服にあたって、その結婚の相手が、左大臣の一粒胤の姫君なのである。その姫君には春宮の方からも入内の要請があつたのに、左大臣はそれを蹴つた。そうまでして臣下となつた源氏を婿に取るというのはきわめて異例であり、春宮の祖父右大臣にしても母弘徽殿女御にしても、挑戦、侮辱としか解釈のしようがなかつた。

しかしこれほどの厚遇も源氏の君にとっては決してありがたくはなかつた。その夜、舅である左大臣に伴われて、三条の邸宅へ招かれたときも、郷愁に曇つた顔をしていた。そして姫君の元に通された。驚いたことに、御廉の前に二人の若々しい女房が深々と手をついて控えている。灯しも明々と闇を払っている。学んだ形式とは異なるがと思いつつ、中

にいる姫君に言葉をかけた。和歌なども詠んだようである。しかし返事がない。ほそぼそと呟く声が聞こえる。「世にも美しい君でいらつしやいますよ。お言葉を」と再三促しているようである。姫君はそれでも黙っている。ちよつと年のいった女房の声で返歌が来た。女房たちの方に目をやると、「姫君はとても人見知りで」「恥ずかしがつておいで」とか何かと取りなしては、恐縮している。

変だなどと思つたものの、許しを請うて御廉を上げると、確かに美しい姫君がいる。源氏の君にしても、これはと意外に思ったが、その後の反応が異常であつた。源氏の君の侵入が予期できなかったものと見えて姫君は茫然自失したのであろう、それと気付くと逃げた。女房たちがすがりついたが、「何、何」と、姫君は逆上している。「殿ですよ」「光る君でいますよ」と周囲がなだめても、「いや」と連呼して、鯉のように口をぱくぱく開けている。源氏の君もあきれて、外に出た。そして障子を開けると廂（母屋の外側の広い屋内廊下）に左大臣が座つているのである。深々と頭を垂れて詫びを重ねているので、源氏の君は「よいのです。そのうち落ち着いてから改めて」などとその場を糊塗するのに協力してやつた。左大臣は抱きかかえるようにして寝殿の母屋に源氏を連れて行き、饗応の限りを尽くした。

二晩目は、暗闇の中を微行んで行つた。御廉を上げて中に入ると、やたらに人の気配がする。女房が源氏の衣を脱がせた。君は促されて御張台上がったところ、横たわっているのは姫君一人ではない。昨夜の美しげな若い女房が二人肌脱ぎになつて姫君の傍らに控

えているようである。「今、御寝なさっております」と一人が小声でささやいた。そして「お手伝い申し上げます」と言う。君は素直に従って、姫君をかき抱くようにして横になった。世にも不思議な行爲が始まった。源氏の君は三人の女の体の上に乗せられた。その後は波に身を任せるしかない潮者のようなものであった。ところが、姫君もそうなれば目を覚まさざるをえない。「何、何」という連呼の果てに、「くえっ」という奇声を発して裸のまま逃げてしまった。取り残された源氏の君に、それが務めと思つたのか、二人の女房が迫ってきたが、源氏の君も意外さに動転して裸のまま逃げ出した。廂には、また左大臣の姿があつた。途方に暮れる源氏の君に「そのままのまま」と片手をあげてひれ伏しつつ、左大臣は「この不調法、何卒お許しください」と再三叩頭した。いつの間に近寄ってきたのか女房たちが源氏の君に衣を着せた。こうして三夜目などは、姫君が塗込（母屋の中央にある土蔵造りの部屋）の奥にこもってしまい、どうしようもなくなって、塗込の外で左大臣や公達が集まって「天の岩戸」の宴のようになってしまった。もつとも、この源氏の実家は、左大臣以下、自称他称を含めて、音曲の名手がそろっていて、その賑々しさは比類を見ない。

左大臣が春宮からの申し出を断つた理由はこれではつきりしたと、源氏の君は溜息をついた。私は途中何度か笑いをこらえるのに苦しんだ。「あなたは目だけでお笑いになるのですね」

これは亡くなつた夫宮からも言われたことがある。どういふことか知りたくて鏡の前で試みても、よくわからなかつたが、どうやらそれを、私はするらしい。

源氏の君にしても、体面もあるし、男としての自然な欲求もあつた。しかしどうやらここ二、三年の試みは、すべて不首尾に終わったようである。これだけの目にあつては当然と思われた。もつとも君はその不首尾の内容については口ごもつてしまった。屈辱的なことだけに、と一応察しはしたが、実は気になることがあつた。源氏の君は一瞬遠くを思い浮かべるような目をしたのである。

三夜目は話に熱中してしまつたためか、あけほのの別れとなつてしまつた。古来、男君は、夜明け前「暁」に帰るのが常識とされていたが、こと恋愛の実際に及んでは、そんなお行儀よくはいかない。むしろ実際の必要性ゆえにか、夜が白みかけてからの方が細かに時間帯が分類されている。「しののめ」「あけほの」「あさぼらけ」夜が明けきる前のこうした美しい言葉たちは、恋が作つたものにほかならない。ともあれ三夜来てくれたことで、特別な関係が成立したことは間違いない。恋の執行猶予は三日というのが不文律である。「ここだけの話にしてください。諸事煩雑ですから」

源氏の君はこう言い残して去つた。その後、六条ではこの逆説的な言い回しがはやつた。もつとも、その内容を知っているのは、私と中将の君だけである。源氏の君は諸事煩雑と片付けたが、とてもその程度の生易しい話ではない。わざとこの極秘事項を漏らしたのだとすると、中将の君が言うように「源氏の君もあのお年でなかなかの曲者でございます」といふことになる。

この初々しい「曲者」は、恋そのものとはかくとして、恋のしきたりを雅にこなすことには長けていた。通いはじめの折には、相手の顔を見る機会もなく、心ゆくまで話をすることもおぼつかない。その物寂しい心を満たすためのものだろうか、枕を交わした女に、必ず男から歌がおくられるという美しい習慣がある。これを「後朝」の文という。

翌朝後朝の文が来た。気のせいか、筆跡がゆったりして優雅であった。当然私も丁寧に返歌をしたためた。

こうして、私の恋は、もつともふさわしいことに、秋に始まったのである。

絹の牢獄

返歌を送ってから、女の性で中将の君相手に一日源氏の君の話に興じた。ことに「絵に描いた餅のような」姫君のことなどは、とても黙っていられるものではなかった。

「しかしお上（桐壺帝）はご存じないのですか」

中将の君は、とっておきの情報を漏らすとき、得意げに鼻の脇を擦る癖がある。

「それはご存じでいらっしゃいましょう。源氏の君は下手をするとお命だつて危険なお立場でございます。左大臣はそういう姫君を抱えて、しかも春宮妃にご内命までいただいて困り果てていらっしゃいます。その二人を結びつければ、双方が救われる。昔からそれが賢帝と言われるお方のやり口でございますよ。外戚としてうるさくなつた二条右大臣側を抑えるために、反対勢力の三条左大臣に肩入れをする。二つの勢力の均衡の上に乗って権力を維持する。目の中に入れても痛くない源氏の君を守ることができて、その上ご自分の御代を固める。抜け目のないお方でございますよ」

「なるほど、双方に脅しがかかりますしね。けれどもなぜ臣籍にせねばならなかったのですか。どうせくれてやるなら親王の方が値打ちがあるでしょう」

「そこでございませう」と中将の君はにんまりと笑った。とっておきの噂話を出し惜しみするのがこの女の道楽の一つである。

いるという噂で、お上は密かに源氏の君をお遣わしになったそうでございます。その者は、源氏の君の人相を見て大変なことを申したそうでございますよ。何でも『国の親となり帝王の上なき位にのほるべき相』だとか。こんなことを秘密にしておけるはずがありませんから、すぐに噂が広まります。右大臣や弘徽殿女御は黙っているはずがありません。何しろ春宮の廃太子なんて珍しくもなくなっていますし、(……)失礼いたしました。お上はまず弘徽殿女御に脅しをおかけになっておいてから、源氏の君を臣下となさることで、逆に弘徽殿女御の機嫌をお取りになったのでございましょう。春宮の将来を保障してやる代わりに、源氏の君には一切手を出すなという取引きなんでしょう。とにかくあの女狐は何をするかわからない酷人でございます。源氏の君の母上ももっぱら毒殺と(めつたなことを)聞いていますよ。産み月の頃、宋より舟が来て二条の右大臣邸に逗留があったという噂。香、紅、白粉、それは今風なお家柄ですからご用もありませんが、そのついでにということも。弘徽殿女御にできないことなんて、ご自分のおへそを噛むことくらいでございますよ。(お前ならできそうね)とにかくお上はまず源氏の君のお命の保障をお求めになったのだと存じます」

「でも、臣籍から親王に復帰して春宮になった例はあるのですか」
「ございます。ただ親王がお一人もいなくなった特異な例ですから、ございませんとお答えした方が妥当かもしれませぬ。源氏の君を左大臣、右大臣に次いで公の後見とするというのがお上の将来計画なのでございましょう。例の占いにも『もし皇位についたら世の乱れとなる』という但し書きがついていたそうでございますが、これとてきつとお上の含みのある思し召しでございますよ」

話をしながら、今さらながらに、この女の情報収集能力には驚かされた。考えてみたら当然で、祖父や先帝の死後、祖父の権勢は消えたが、そこにまつわる女房や中下の貴族など数多くの人間集団はそのまま残っているのである。あの少年がそういう機微を心得てこの六条に目をつけたのだとしたら、やはり、ただ者ではない。

しかし、今後の相談などを済ませて中将の君を下がらせた後、一人になると、今度は女の憂愁が私をとらえた。源氏の君の面影がちらつくとともに、「はじめての女」「初恋」などという刺激的な言葉が浮かんできて、妙にのぼせた。夢見がちな心の中に、忘れていた切なさが甦った。恋は必ず、どんなところからも不安材料を見つけ出す名人である。あの折の源氏の君の急変も気がかりであった。そこには何か割り切れないものがあった。

源氏の君の持つ、不思議な二律背反性、矛盾、それらが魅力の光芒を放って私の心を捉えた。これが間違いなく運命であったことを私は確信してやまない。

待つ女の習性とはそんなものかもしれないが、源氏の君の訪れが、三日、四日、七日という周期であることに気が付いた。どうやら内裏に四日、三条の左大臣邸に三日、という具合に拘束されているらしい。六条のお渡りはその合間ということになる。桐壺帝も源氏の君を引き留めるために、母のゆかりの桐壺を直廬(宮中の公邸)として与えて、いないと何かと寂しがるので、まず公務もあつて四日間。一方左大臣としても婿にとつたという

体面もあって、あれこれと遊びの工夫を凝らしては何とか気を引こうとするので三日間。そんな大それた綱引きに私が対抗するのは身のほど知らずというものである。

「二条に院が造営されるそうです」

例によって中将の君の早耳でこういう話を聞き込んだ。もともと二条東洞院ひがしとういんの伯父大納言邸はそのまま桐壺更衣に伝領されているので、祖母君亡き今は源氏の君のものである。それを改修するのに際して、桐壺帝の命令で公式の工事となつたらしい。とすればそこは「院」と呼ばねばならず、臣下となつた源氏の君の里邸としては妙な具合になる。私邸か公邸か不分明になるということは、源氏の君自体、臣下か御子の一人かはつきりしないことになる。二条の右大臣家あたりはまた騒いだようである。しかしこれは一種の朗報であつた。源氏の君が自邸を持てば、おのずと自由の身となる。

こうしてときどきは源氏の君が来てくれるのが私にとつては何よりも嬉しかったのだが、帝と一の上（左大臣）の奪い合いの人氣者だけに、暁を待たずに出ていくことも多かつた。それは、耐えることができた。それよりも、肝心なことで、私の心は乱れていたのである。とかくこの君は神経質である。ちよつと気になることがあれば、それこそ、匂い、髪や絹の手触りから対人関係の心配事まで、何かあれば、男でなくなるのである。相手が気に入らなかつたりすると、もはや絶対に安全な男と化す。その上、そういう神経の障害すべてがなくなると、男であるためには、ある特殊な興奮が必要となるのである。

ある夜、こういうことがあつた。昼間の疲れもあつたのか、いつものようにたった一度

のその後は、そのまま眠つてしまつたので、私は年がいもなく泣きだした。

「御息所みせしよとして世間を憚らねばならぬ身ですから、表立って君のお情けにおすがりすることもかないません」

こう口にしたときに、源氏の君の態度が豹変したのである。あの弱々しい君とは別人であつた。私は満足以上のものを味わつた。朝など起きて見送ることもできなかつた。

何が原因なのかと私は思いめぐらせた。最初のときは私の恥じらいであつた。次は、涙ではない。恨み言でもない。ようやく気付いたのは「御息所」という立場である。普通人内して帝や春宮の御子を産むとこういう敬称を奉られる。時によつては後の総称としても用いられる。一旦こう呼ばれると世間の目はそれまでとは異なってくる。つまり、注連縄しめなわのついた印象を持つのである。それかと、気付いた。この結界が源氏の君の欲望を刺激するのではないか。

私は愕然とした。「はじめての女」としての事実は揺るがぬものの、源氏の君の心に初恋の灯火を点じた「禁じられた」女が他にいる。そういう直感が背筋を走つた。私は迷わず中将の君を呼びつけ、君の女関係について、その線で調べるように命じた。旬日も経たず、この女はにまにまと笑いながら報告に来た。

「さして秘められた筋の話ではないのでございます。お薦めになつたのもお上でございます。弟君の桃苑式部卿宮、その姫君が御歳十七にあいなります。源氏の君は文をお送りになつて、それで終わりでございます。（終わりとは）つまりそれきりということござ

います。姫君にはまったく脈がなく、その後文もあったかなかったか」「いつのことですか。ここにいらっしやる前、それとも後」

「前だとは存じますが」

私はこれを聞いただけでふさぎ込んだ。何のことはない。源氏の君は適当な添臥そいあしを探していたというだけのことである。それが私であろうが、その桃苑式部卿の宮の姫君であるうが、誰でもよかったのではないか。家の奥の闇の中で生息するのが定めめの女にとっては、出会いなどといっても、所詮しょせんはそんなものでしかない。

「この一門の中で一番偉いのは、この私でも父上叔父上達でもない、そなたと二条京極の姫（源氏の母）なのだよ」という祖父の言葉が、ため息とともによみがえった。

確かに古来、この国では娘を尊ぶ。しかし別段ありがたいとは思わない。ひよこと同じである。この国は異常に豊かな自然に恵まれていたため、耕せば耕すほどものが実る。労働力、すなわち子どもを産むことのできる性は、あるいは土地以上に価値がある。そんな大切な娘が手放すはずがなく、大陸式の嫁入りという習慣はない。結婚しても男が女の家に通い、生まれた子どもも女の家のもとなる。要するに母権社会なのである。男は胤をまいて女の家に寄生する。原則的に所有権は女に帰す。

この習慣の上に大陸式の律令制という父権社会を鍍金めっきしたものの、母権社会の意識が生きているのが平安の都の実情である。息子が生まれても喜ぶ家はない。どうせよそに婚取られてしまうからである。娘が生まれると、親はせつせとかしずき、より高位の家の婿を

とって自家の地位向上を図る。入内というのも形式的には嫁入りなのだが、帝や春宮とよつぐを婿にとるのと事情は変わらない。娘の家が面倒を見る。

私は、そういう后がねの姫君としてこの六条に生まれた。しかし、頼りの祖父は五歳のときになくなり、母も私を産んで後すぐに亡くなった。他に、家を宰領する「上」と呼ぶべき女もいなかった。奥の面倒はもっぱら私の乳母ちちにゆだねられていた。温厚一途な乳母はいつも困った顔をしていた。上唇がふくらんで下唇にかぶさり、鼻の下に横皺がよって、視線が斜めに引き上げられるという、不思議な顔をよくした。これが思案の表情だったらしいが、この思案が期待どおりの知恵を生んでくれることはまずなかったと思う。いつももうろたえていて落ち着きがなかった。「あ、そうそう」と言っただけで立ち上がった。思い直してまた座り込み、別のことを始める、などというのはしょっちゅうであった。私や実娘の中將の君が悪戯をしても、叱ることなく、ひたすら念仏を唱えて仏のご加護を祈った。女房どもに対しても、指導が行き渡るはずもなく、何かというと「末恐ろしゅうございます」というのが口癖であった。乳母にとっては、人間世界すべてが不思議で不安で、そして新鮮であったことと思う。乳母に望みがあるとすれば、今日が昨日と同じで、明日が今日と同じ、ということくらいであったかと想像する。それが人間の基本形だということとを私はこの乳母から習った。そして、乳母は私の言うことを何一つ理解してくれなかったのに、終始私を愛してくれた。

私が、昔おてんばだったと言っても誰も信じてくれないかもしれない。四間四方しげんの

絹の牢獄でお姫様をさせられていること自体が耐えがたかったのである。とにかく外へ出たくてしようがなかった。御簾を見るとめくりたくなくなり、ついたてや御几帳を見ると倒したくなるという点では、意図は違うものの後年の源氏の君とそっくりであった。ただ、源氏の君の目的がその中であつたのに対して、私の目的は外界にあつた。実際何度も脱走を企てては、乳母を困らせた。

乳母の手に余つたのであるう、小少将という女房が私たちの指導に当たることになった。幼女の教育は最初手習いに始まる。はじめ「難波津」の歌を書くのが吉例となっているのだが、私たちはずっと「難波津」であつた。ものがなかつたのである。

「一つのお手本を極めるまで書き続けるのが真の上手になる道です」

小少将はいつも口をへの字に曲げて、長い説教を繰り返した。人が二言三言で済ますことをこの女は何百言費やしても満足できないという、一種の名人気質だったのかもしれない。本人も何を言っているのか途中でわからなくなるようで、それがさらにこの女の腹立ちをいや増すのであつた。私も中将の君もともにこの女を憎んだ。ことに中将の君は、弁の立たない者の長口舌を憎むようになり、同類に遭遇するたびに「三百代言」だの「弁舌馬鹿」だのとのしるようになった。

要は、六条の女房たちの誰もが書に堪能ではなく、お手本を供することができなかったのである。私たちは三歳頃から誰よりも上手であつた。悪意というのは反射するもので、当然、この女も私たちを憎むようになった。この女の取り柄は整理整頓を愛することだっ

たが、私は書き散らした手習いの紙や硯箱を女房たちが片付けるのを嫌つた。気が向いたらいつでもそれができるようになっている状態を好んだのである。また、色とりどりの紙が散乱して偶然に作る美を愛していた。一方、一緒に手習いをしている中将の君は、その塵芥を豪華絢爛に大量生産するのを好む癖があつて、字は私よりうまいのだが、目的至上主義と言うべきか、床も道具も墨だらけで、ときには顔や手にも端麗な筆跡を残していた。これには小少将もしばしば逆上して「折りてみば落ちぞしぬべき（落ちそうな）秋萩の枝もたわわに置ける白露」というのが姫君のあるべき姿だと叱りつけた。

「ならばそれを手本に書いてください」

つんと横を向いて、そんな小憎らしいことを言う私に、小少将は黒い齒を並べて見せつけるような作り笑いで、「たまにはこれで遊びましょう」などと言って雛人形や双六を出してきた。私は、基本的に文字が好きなのであり、手習いが歌であることに魅力を感じていたのである。つい、かつとなつた。満々と墨をたたえた硯をこの女に投げつけてしまったのである。小少将は顔中墨だらけになり、そのしたたり落ちるしずくで単まで墨染めになり、泣きながら奥に駆け込んでしまった。

しばらくして「姫君のご乱心は憑きものの仕業だ」という「世論」が形成された。乳母も父も気弱で諸事声の大きな者に従う傾向があつた。

私は加持祈禱を受けることになつた。場所は「塗込」であつた。塗込というのは不思議な場所で、そこだけが土蔵作りになつていて寢殿などの中央にある。普段は使わず、儀式

や病気、または死の床として用いられる、聖なる場所である。私はそこに寝かされ、修験者らしいのが御簾の彼方で護摩をたいて祈っていた。「憑坐」という靈感の強い少女たちが脇に並び、なんと、寝ている私に人々が折檻を加えるのである。板かひしゃくのよなものだたかかれ、私に憑いている悪霊を追い出し、それを憑坐にのりうつらせて調伏するのである。普通は叩くといっても撫でる程度なのだが、忠義に燃えた小少将がその役を買って出て遠慮なく私を叩きのめした。乳母も同席していたが「手加減を」などと言いつつうるたえるだけで、私は瀕死の状態になった。このとき、中將の君が瓜子のように突進してきて荒れ狂い、護摩段を粉碎して火事を起こすということがなかったら、私が無事であったかどうかわからない。姫君が皆「折らば落ちぬべき萩の露」のようにおしとやかなのは、間違いなく教育的所産である。

姫君には帝もかしくというほど、大切に育てられるものなのだが、はたして四間四方の絹の牢獄が本人にとって嬉しいかどうかは別である。かごの中の小鳥が歌うのは、楽しいからではなく、憤りからである。

女とは、いわば、「庭木」のようなものかもしれない、男は、「農具」のようなものなのかもしれない。相続権、処遇が尊重され、不自由だが大切にされる女が、本当に幸せなのか。どこの田畑でも重宝され大事にされる反面、使えなくなったら捨てられる道具にすぎない男が、実は不幸なのか。私には判断がつかない。

こうして整理することで、不思議と気持ちがおさまる。私はうるさい女であるが、一般に感情過多の女の方が論理的だと思う。論理で自分を丸め込まなくては日々やりきれないのである。源氏の君が、私だけを志したのだと、そう思いたい。けれども二件目だったらしいと知って煩悶する。しかし私と式部卿宮の姫君とを比較したわけでもなければ、しようもない。したがって、何も嫉妬に苦しむ必要はない。やっと気が静まった。と、こうなるのである。

そしてもともとの不安が残った。「禁じられた女」が、どこかにいる――。

春の日盛りの砂糖菓子のような一年半であった。源氏の君を三日、あるいは四日と待ちこがれるうちに、後年のいまわしい噂のように、本当に地に足が着かなくなってきた。

恋の醍醐味はむしろ相手の不在にあるのかもしれない。現のはかない逢瀬が、味気ない宵々を夢の淡紅色に染め上げる。満たされてあることの喜びが、さらなる歓喜を求めて夢のなかに広がっていく。気が付くと、私は身も世もないほどに源氏の君に溺れていた。

源氏の君も赤子がいはいを覚えるように、雅になれそめた。しかし女を知る機会もないうまに、六条殿のようなところに来たのである。戸惑いや不安がなかったとは言えない。「噂では六条の御息所といえば、和漢の教養にあふれ、書も歌もことさらに堪能で、当代比類なき雅の人として誰知らぬお方と聞き及んでいましたが、たしかにお美しく噂以上の方とは拝察いたしますが……」

さすがに男女のことを表現する語彙はまだ持たぬと見えて、君はかわいく言葉を濁した。私はと言えば、そのとき、腹はいになって体の脇に髪を散乱させたまま、お行儀悪くも菓子を食っていた。御簾の向こうからは、地響きを立てるような中将の君のいびきが聞こえてきた。

「優雅、というのはほど遠いかもしれませんね。確かに」

ばんばんと手をたたくといびきが止んだ。

「だってつまらないのですもの。あわれを秘めて伏し目がちに、恨み言の歌を詠む。折らば落ちぬべき萩の露だなんて。決まり切った姫君ぶりは、ここではご法度……」

「私など大学に行って紀伝や明経明法の講義を聞いただけでも、人からご身分に障りますなどと叱られます。学問にも身分があるのですね。（これが皮肉ではないのがこの君である）藏人所で少しお手伝いをでもと書類を運んだだけでこの世の終わりというくらい迷惑顔をされます。『何もせず、みんなまわりにまかせきり、というのが私たちの仕事なのです』などと三条の兄（左大臣の嫡男）が申し立てました。何を尋ねても大人はよい顔をしませんし」

「それは無礼というものかもしれませんよ。せっかく皆さん何もご存じなくて優雅になさっておいでなのに……」

源氏の君の大学の話はおもしろかった。今どき、上流の貴族の子弟は大学などへは行かない。遣唐使の昔は、多くの者が大学寮に通ったそうだが、もとより出世だけが目的であった。学者たちも二百年前のような権威もなく、権門の催しの際に漢詩などを作ってご馳走や褒美にあずかるのを楽しみにしている高等乞食にすぎない。そこに顔面どおり知識欲で参加した源氏の君が不審がられるのは無理のない話である。しかも解釈の暗記ではなく、この子の場合真剣に考えるのである。孔子の言うことを完全に守ったら、社会秩序の安寧維持が達成されるために史的变化など起こらず、したがって歴史というものはありえない。礼教を遵守したらわざわざ工夫を凝らすことも感心できないことになるので、木製の鋤や

鍬が鉄製になつたりしない、米の取れ高も変わらず、人口も増えず、永遠に今が続くことになる。絢爛たる逆説にあふれている。儒学というものが輸入された日から、すでに精神性などなくなつていて、社会運営を潤滑に進めるための「油」と化していったという事実は、すぐに源氏の君にとつて自明のこととなるのであろう。

「『物忌み』などはどうなさつておいですか」

「それは六条でもこんな不信心なのは私とこれ（すやすやと寝息を立てている）だけです。皆が気持ち悪がるので、何かあればちゃんと守りますよ。この女でもさすがに外出はいたしません。もつとも『庚申』の日にこの女はぐっすり寝ていましたけど」

「ではやはり誰でも陰陽道を信じて守っているわけではないのですね」

「『方違え』なんて誰も本気で信じてはいないのですよ。けれどもそれを破つて災難に遭つたら後悔する。やつておけることがあれば、やるに越したことはない。信仰ではなくて科学なんですよ。不幸を回避する技術として、この国では仏教や陰陽道を輸入した。それでも災難は降ってくる。そこで疑うのではなく次々と目新しいものが流行するのが不思議なところですよ。要は、信じているのではなくて、信じたいです。こんなことを、唐や天竺の人が聞いたらびびくりするでしょうね」

十六歳の源氏の君はにっこり笑つて「随分と腰の引けた科学ですな」とつぶやいた。

世間の噂とは異なり、六条で交わされているのは、このような雅やかではない会話であつた。しかし、思えばこの頃がもつとも幸せだったのかもしれない。その後、幸せなどとは溺れていたのであろう。

「降つて参りました」

突然起き出した中将の君がそう言つて、あちこち戸を立てて回つた。源氏の君のお渡りときは他の女たちは遠ざけられる。しかしこの女は腰軽く、よく動く。

雪かと思つと、気が滅入つた。私は何よりも寒いのが嫌いで、火鉢をかかえて塗込にもつてしまう方である。六条殿も西の対のはことに土壁を厚くして、夏場の湿気防ぎに四面に戸を設けてある。

大きな手あぶりに炭火が加えられ、さらに火鉢が二つ三つ届いた。すでに赤々と火がおこっている。

「そう言えばあなたのお母様は寒がらない人でしたね」

中将の君とは逆に、私は、思わせぶりというのが嫌いな質である。しかし、源氏の君ほど自分の関心事に素直な人間はいない。ついその誘惑にかられる。

「十八年前、この六条の寝殿から南庭の雪景色を見ていらつしゃつたのですよ」

春というのにその日の前夜大雪が降つた。しかし翌朝は嘘のような快晴で、すべてが白銀に輝いていた。寝殿にはおびただしい宝物、衣装などが所狭く運び込まれていた。衣架

が雪の反射にさらされないように、母屋の中央に集められており、それぞれに掛けられた柱、単などが絹の滝をなしていた。まさに豪華絢爛と呼ぶべき、目くらむような色彩の氾濫であった。折しも姫君は人垣と壁代、幾重にも迷路のようになった御几帳に囲まれて、南の廂で雪見をしていた。それと聞いた姫君が私の方を振り向いたときの横顔が、南庭の雪の照り映えの中にほんやりと浮かび上がった。光にも好き心があると見えて、この絶世の美女の周りに大小の光輪を作って戯れていた。ようやく格子の庇が嫉妬深い光の乱反射をさえぎってくれて、その顔がはつきり見えるようになった。私は思わず息を飲んだ。この世のものとは思えないほどの、哀しいまでの美しさであった。しかし、そのときかけてもらった言葉はおろか、顔立ちさえもろくに覚えていないのである。不吉なまでに激しい感動は認識を寄せつけないのであろうか。白雪の中に冷ややかな炎の幻想を見たような印象だけが残った。

ただ、この女御入内は祖父の死で一頓挫した。後に、ろくに後見もないまま入内したときは、一格低い更衣の身分であった。

しかしあの美しさにあの気品である。桐壺帝の寵愛を独占したとしても不思議ではない。当然とも言えるが、後宮の女たちに美人というのは珍しい。美しいから入内するのではなく、父親の権力で入内するのである。良家の姫君は兄弟でも顔を見ることが禁じられるくらいなので、権門勢家の姫君はみな美人ということになる。良家の公達ならば、そぞろ歩きの合間に、垣間見などという艶なことが可能になるので、それ相応の素敵な出会いを夢

見ることができるといえる。かわいそうなのは帝である。源氏の君のような目には遭わないもの、あてがわれるのは皆、躰のよい、諸事行き届いた、それでいて器量だけは恵まれないという権門の姫君ばかりである。ひよつとするとはじめに睦言を交わすのは闇の中という風習は、後宮で成立したのかもしれない。見えさえしなければ誰でも美しい。皇胤が千代に八千代に栄えるという仕組みである。それでもいずれは見る。桐壺更衣のような人はまさに掃き溜めに鶴と言えた。しかしこれこそ規則違反の極致なのである。しかも後見もなく、更衣にすぎぬとなれば、わざわざいびり殺されるために入内したようなものである。

桐壺帝にしてもその辺の事情がわからなかったはずはない。だいたい桐壺というのは清涼殿からもっとも遠く北東の角に位置する。帝がそこへ行こうとすると、女御すべての直廬の前をわざわざ通り過ぎて行かねばならない。それが毎夜続くとすると、後宮の雰囲気は冬枯れの草原のようになり、一点嫉妬の火が上がると一気に燃え広がる。帝のお迎え見送りに女房を出すときも、廊の上に鳥の死骸や汚いものを置いたり、ありとあらゆる嫌がらせがあったと聞く。しかもその背後で後宮を牛耳っているのは弘徽殿女御である。

この女も決して順風満帆な後宮暮らしをしてきたわけではない。退勢挽回の期待を担って入内したという点では、弘徽殿女御も桐壺更衣も同じ「悲劇のお后」なのである。ただ弘徽殿女御は、そこからたくましく成長していった。その秘訣は、愛されたいという女の自然な願望を捨て去ることにあったのだと思う。帝の第一夫人の地位を手に入れるためには、何よりもまず競争相手をすべて消すというのが由緒正しい和風の方法というものであ

る。よい后、美しい后、帝に愛される后。現世においてそんな戯言たわごとに耳を貸してはならない。そんなものは死後の戒名として山ほど手に入る。弘徽殿女御は、苦勞の末、与えられた任務をまっとうし、めでたく一宮（長男）を産み、前途洋々たるものがあつた。なのに美しく帝に愛されるなどという掟破りの女がしゃしゃり出てきたのである。しかもそれがかつて自分を苦しめた女どもの末裔とあれば、容赦する必要などどこにもない。桐壺更衣は抹殺されるべき運命にあつた。

桐壺帝も未だ若く見通しも甘かつた。正妻弘徽殿女御との間に世継ぎの皇子をもうけ、次々と姫宮さえ生まれていたので、公きみの結婚についての義務は十分果たしているという頭があつたのであろう。多少好きなことをしても許されると考えたのもつともである。確かに、淫欲に耽ろうが漁色しようが、その貫禄を褒められこそすれ非難されることはまづない。またたとえ一人の女に溺れても場合によっては目をつぶってもらえたかもしれない。しかし相手が悪かつたのである。桐壺更衣は、先帝の代が続いているならば、堂々と女御入内を果たし、弘徽殿女御と後の地位を争うことのできる女であつた。

桐壺更衣は現在の身分の低さゆえではなく、本来の門地の高さ、元来の権力の大きさをえに迫害されたのである。帝も遅まきながら実状を理解し、更衣の直廬を身近な後涼殿に移し何とか保護しようとしたが、帝の力には自ずと限界があつた。

昔よく祖父が言っていた。「本朝の帝に悪虐の君主はいない」「お上は本当に『神』だから、そう呼びするのだ」これらの言葉はきれいなことではないと思う。悪虐の王、暗君はそうするだけの権力があつてはじめて出現するものである。

不撓不屈の志を抱いて即位した帝も、煩瑣はんさな雑務に忙殺され、何かしようとするたびに官人たちのしらけた表情に心を引き裂かれ、悪評などがちらほら聞こえはじめるともうだめである。ところが、誰かがこっそり寄り寄ってきてなぐさめてくれ、帝が周囲の顔色を窺いはじめると、どういうわけか急に居心地がよくなる。人々の視線が熱くなり、それまで絵のように沈黙していた老人達が何かと相談に来たりするようになる。帝王教育とはかかる去勢にほかならない。

けれども他に実権を握っている者がいるわけではない。強いてあげるならば世間である。日本は大陸の東の果ての吹き溜まりなので、さまざまな種族がいて、争って収拾のつかない状態になりがちであつたと考えられる。戦いに飽いた祖先たちは、とりあえず、正義よりも周囲との「和」という諦念ていねんでことをおさめようと考えたのではないか。その結果、あわあわと湧き出してきた霧のようなものが「世間」である。妥協と諦念で生まれたものだけに、世間といつても、何が世間なのか誰も知らない。

帝が神だとすると、そんな世間に仕える現人神なのであろう。「大王おおきみ（帝）は神にしませば」と歌われるが、「人ではない」という裏の真理が透けて見える。帝は人にはできない。人並みの欲望を持たれては、諸事都合が悪いのであろう。

せめて後宮だけでも、夜だけでも、帝の自由になるよう、その心を慰めるように、と考へた時代も遠く過ぎ去つた。帝の居住区が清涼殿に引越してからというもの、夜さえも

神として世間にお仕えしなくてはならなくなった。摂関家の後宮工作が始まったのである。嵯峨帝の頃を境に、何十人と生まれてはいた御子の数も激減している。

桐壺帝のかわいい恋は、こうして、多数決で、踏みつぶされた。

御子光る君出産の三年後、桐壺更衣は、恋と苦しみしかなかった、花火のようにはない二十年の人生を終えた。その野辺送りの夜、弘徽殿では賑々しく管弦の遊びが催されていったという。

愛を捨てた弘徽殿女御は「国母」として栄華を極め、愛された桐壺更衣は非業の最期を遂げた。男の愛というものは、結局女を救えるものではないのかもしれない。

源氏の君が退出した後、雪が降り続いていた。雪の気配というものは不思議である。音でもなく、肌を感じるでもなく、それとわかる。大昔からそうなのであろう。雪は人の往き来を妨げ、人を隔絶する。人は雪の日には世間との縁を切って、自分になる。私の物思いは、桐壺更衣から、自然と、亡き夫宮（前坊、前春宮）のことに移っていった。

いつもそうするのだが、奥の文箱から横笛を出した。夫宮の遺品である。笛自体特別な品物というわけではないが、金襴の襖紗に包んで大切にしまっている。私はうまく吹けないので、おそらく笛としての寿命も終えているかもしれない。楽器というものはそういうものだと、いつかそう夫宮が教えてくれた。女と似ている。そう思うと、竹の表面がかさかさとしたような感触である。唇を当ててみたが、音は出ない。

夫宮は元來名譽にも権力にも一切の関心のない人物であった。どこかの山の中で庵を結んで静かに暮らすことを生涯夢見続けた。その夢を壊したのは、ほかならぬ私の祖父であった。しかも、夫宮でなくてはならなかったわけではない。皇位継承権を持つ者なら誰でもよかったのである。「誰でもよい」時代であった。結婚するのも、即位するのも、入内するのも、また生まれてくるのも、誰でもよかったのかもしれない。要はその役柄をこなすかどうかの話である。私達はつまれるのを拒めない花苑の花のようなものであった。

そして夫宮は、置き忘れられた人形のように、その役柄をこなし、桐壺更衣と同様の辛酸をなめた。あるいは、弘徽殿女御の春宮いびりは、その後には我が子をすえるといふ冷静な目的意識があっただけに、嫉妬と不安にかられての前者に比べて、より苛酷だったかもしれない。その陰惨な春宮御所に、十一歳の私は、三条の大宮に手をひかれて入内した。その頃は、祖父が死んでいて六条の勢力は失せていたため、すでに三条は敵方ではなくなっていた。左大臣の妻であるこの大宮と、桐壺帝と夫宮は同胞の兄弟妹であり、六条はその三条、桐壺帝の側の庇護を受けていたのである。

何も知らない私は、入内ということを物語の世界のようにただ夢見ていた。しかし、現実はそのようなものではなく、いつ毒殺されるかわからない夫宮のために、中将の君がお毒味陪膳をしたり、私が寝ずの番をするなどという陰鬱なものであった。そして、めでたく、夫宮は春宮の地位を捨てた。隠棲の場所は兄桐壺帝が実父のいらっしやる朱雀院を薦めたのを断って、強いて六条殿を選んだ。

私が十六になったとき、姫宮が生まれた。男であれば、今後政争の巻き添えを食ってど

んな憂き目に遭うやもしれない。しかし、女であることが、私たちの存在を世間から隠してくれた。忘れられてあることの幸せを夫婦でかみしめつつ、穏やかな日々が過ぎていった。

私は夫宮の横笛が好きであった。春や夏のたれこめた夜気に、潤った音色が優しく響くのも、秋や冬の澄み渡った夜空に、峻烈な音がはるか彼方まで舞い上がっていくのも素晴らしい。夫宮の死後、郷愁から、何度か笛の名手と言われる者を呼んでは演奏させたが、とても夫宮の音色には及ばないと思った。専門家という者はどこか卑しい。技術はとうてい気品にはかなわない。

そうこうするうちに、元来病弱な夫宮が床についた。看病をしながら、二人でよく「惟喬親王」の話をした。惟喬親王は在原業平をはじめとするお気に入りの人々と水無瀬の離宮で狩りや歌に明け暮れる雅やかな日々を送っていたが、思いがけなくも弟宮が春宮となり、その失意のままに出家し、小野（大原）の里に隠棲してしまった。大陸式の建前では、長子相続が常識なのだが、弟宮は撰閥家の外孫だったのである。業平は雪の中をおして皇子を訪ねたが、懐しんでなかなか帰してくれなかったという。

「忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏み分けて君を見んとは」

この業平の歌を夫宮はいたくお気に召していた。

「上の句のよくわからないところが好きです。水無瀬での日々が夢なのか、出家したことが夢なのか、それともこんな雪深いところに隠棲しているのが夢なのか。また、何を『忘

れては』と考えても同じ疑問にたどり着きます。私自身のこと不思議な夢のようで。だいたい自分が春宮になるなどと思ってもいかなかったのに、子どもの頃から伊勢物語のこの下りが心から離れなかったのです。こうなることを、知って……いたのかもしれないね……」

夫宮は遠くを見るような目をした。そして忘れられない一言を口にしたのである。

「人生とは、覚めることではなく、眠ることによって終わる、夢なのでしょいか」

その後、夫宮の病状は一進一退を繰り返して、何ヶ月にも及んだ。

秋の夜長であった。夫宮は具合がよいらしく、縁に出て、池の面に映える月を楽しみつつ笛を吹いていた。ときに軽やかに、ときにむせび泣くように、今宵はこのほか興がのっているようだ、そう思った。

ふと、笛の音が途絶えた。そのときであった。夫宮の魂は、悲しみに満ちた現世の肉体を離れ、秋の夜空に静かに旅立っていった。

禁じられた女

源氏の君のお微行はたいいてい夜半過ぎであった。いつも受領の使うような網代車で、狩衣などもことさら地味なものを好んだ。私の立場、自身の三条に対する遠慮など、理由はさまざまだと察するが、元來姿をやつすことが好きだったのである。「尚綱」という言葉がある。綱を着たとき、その華やきを尚すのに薄物を羽織ることが中国で流行した。一般に謙虚を表す比喩として用いられるが、隠すことはかえって目立たせる結果になる。源氏の君のやつし好きは、この手のお洒落なのである。したがって網代車に用いる竹なども、古びた寂びを醸すためにわざと遠火で焼いたものから厳選しているし、狩衣もよく見ると、もつとも顔立ちが映える地味な色合いになっている。すべて、わざとである。それがこの君の不幸につながるのだが、源氏の君は、自分の美しさを熟知していたように思える。朝の装いの際など、髪も着付けも全部人任せで、なげやりでさえあった。それでいて出掛ける際には凛とした姿が仕上がっているのだから、きっと女とは異なった不思議な関係を鏡と結んでいたに相違ない。

雅やかに闇の中で睦言を交わしつつ、この夜も男女のことは、なかった。その後が決まって困ったことになる。源氏の君は、演技ではなく、本当に落ち込むのである。

「私も老けて参りましたから」と慰めてみたりしても、嬉しいことに納得してくれる気配はない。

「三条の兄などは『いつでも、どこでも、誰とでも』などと豪語しています」

十六歳の源氏の君は、このように幼かったということを特筆しておきたい。

「あの、よろしいでしょうか、品のないことをお聞きしても」

突拍子もないことをいきなり切り出すのが、源氏の君の癖であった。しかし、誰に教えられたわけでもなく、優雅な媚態というものを、この少年は心得ている。雅をなすためには、まず雅でなくてはならないが、雅の敵は、足の速い自意識だけである。その点、終始自分の心配事にかまけているこの少年の雅には傷がつく恐れはない。

「美しい女といっても二とおりあるのではないのでしょうか。艶めかしく男心をくすぐる女と、優美で憧れを呼びさます女と。私がその気になる女はとても妻にする気にはならず、妻として厚くかきたくなる女には、その……欲望を感じない」

「はっきり二手に分かれるのですか」怖々私がそう聞くと「いいえ極端な話です」と静かに源氏は答えた。

「たとえば私などは」

「困ったことに、ほとんど後者です」

「ほとんど、の残りは……」

さすがに源氏の君は黙って私の手を引いてくれた。

後刻、いつものように中将の君が夜明けの御膳を用意した。格子戸を開けると夜気がなめらかである。冷気に切れがなくなっている。春がこんな六条にまでひたひたと忍び寄っ

て来たのである。

硯箱に酒肴が調えられている。ふたを取って膳にすると、丸々とした紅梅の蕾を三つ四つ付けたひと枝が添えてある。肴は山野草の煮物で、紅梅に煮物の胡桃色が映える。

膳部が片付けられると、源氏の君のお出ましとなるのだが、私には悪い癖がついてしまった。お見送りをしないのである。理由は二つある。一つは恥ずかしくてとても詳しくは書けないような理由で、体が言うことをきかないからである。夢の中で海底に飲み込まれていくような感覚の中から、どうしても逃れることができない。そしてもう一つの理由は、恐いからである。暁の別れが永訣を予感させるような、そんな気配に襲われる。

ところが、この東雲に、私はとんでもないことを口にしてしまったのである。

「そう言えば、先帝の四の宮（藤壺女御）が、あなたの母上にそっくりだという噂がしきりでしたね」

いでたちを整えた源氏の君が、振り返りざま頬を染めた。ここまで正直だと嫉妬のしやうもない。私は再び寢所にもぐり込んだ。あれほど心を痛めた例の問題の答えがこれなのかと思うとばかばかしくなった。源氏の君に禁断の恋の雅を教えた女は誰かという件である。その答えが自分であると密かに期待したこともあった。しかし外れた……。

その後、調べれば調べるほど奇妙な事実が出てきた。というよりも誰でも知っているのである。それも、私生活については寡黙で有名となる源氏の君が、どうやら自分でふれ回っているらしい。しかも「ここだけの話にしてください」という六条の流行語を必ず最後

に付け加えるそうである。「私は宮（藤壺女御）のことが好きなのですが、相手にしてくれませんか」などとしゃあしゃあと言っているこの少年の底意に何が潜んでいたか、その答えはおのずと知れることであろう。

「藤壺女御が桐壺更衣にそっくりだという噂は誰しもご存じですから、幼い頃から懐いていた源氏の君がいくら恋い焦がれても、亡き母を慕う哀れな心根に同情しこそすれ、不遜だなどと眉をひそめる人はまずいますまい。お上もご存じで、藤壺あたりではかっこうの笑い話になっているとか……」

中将の君ですら判断に苦しんだのである。桐壺帝も私も、また藤壺宮も、甘かったのは無理もない。無邪気で素直な十六歳の少年の愛くるしい笑顔に、誰が悪魔にも等しい稀代の策士の面影を見ようか。

よほど壮年の桐壺帝の方がかわいらしかった。世間の現人神にすぎない無力な帝でも、神である限り崇りをなす。桐壺更衣を亡くしてから六、七年は、よき帝、よき父として世間の期待に応えることだけを意として生きてきた。そろそろ虫がおこってもおかしくない。「それにしてもできすぎた話ではないですか。先帝の四宮が入内して、しかも桐壺更衣に瓜二つとは」

「どうしてでございます」中将の君は私に何か考えなり意見がありそうなときは上手に聞き手に回る。

「昨今何か災害があるたびに、故冷泉院か先帝、もしくは祖父君の崇りということが取り

沙汰されるでしょう。冷泉供養などと称してこのところ法事ばかりです。ところがもしこの藤壺女御に御子でも授かれれば、将来皇胤を残すことになり、実質的な供養にもなりまじ、右大臣の権力基盤を揺すぶることもなりまじよう」

中將の君は二重あごを引きたたんで領きつつ、指先で鼻の脇をこすった。

「それにご後見でございますよ。兄君兵部卿宮にお沙汰があったのでございますが、宮様方に実質的なご後見など……。どなただと思しめします」

そう言われて、はっとした。そして思わず吹き出してしまった。兵部卿宮の北の方の実家は、飛ぶ鳥落とす勢いの、あの二条右大臣家なのである。

右大臣は名門の出とは言えない。閨閣によって三条に近づき、娘を桐壺帝に入内させることで政権の一翼を担う身となった。こういう人物にありがちなけん味、落ち着きのなさだけはたつぷりと持っていたが、待つという胆力に欠けていた。娘弘徽殿女御が桐壺帝の御子を生むことだけを祈って待っておれば、後に禍根を残すこともなかったのである。しかし、右大臣はじつとしていらなかったたのである。まだ先帝の御代で、桐壺帝というものが実現するかどうかもわからなかった。少なくとも祖父にはそのつもりはなかった。「ご尊顔を押し奉り」と挨拶して回るのが、右大臣の癖である。今でもそれをやるらしく、源氏の君や頭中將のような若手にもこれを欠かさない。酔ったときなど、屏風の虎や竜にもこの挨拶をする。祖父健在の六条にも、たびたび「ご尊顔を押し奉り」とやって来た。

そしていきなりであった。先帝の一宮（現兵部卿の宮）に、義娘を奉ったのである。本

人にしてみれば、これで安全を購ったつもりだが、敵味方とも啞然とした。政争の最中に敵味方に二股をかける將軍というのも珍しい。桐壺帝即位を悲願としていた左大臣も、桐壺帝自身も、当然これをどうかと思わざるをえなかった。あの弘徽殿女御がさめざめと泣いたということは特筆しておかなければならない。まだ桐壺更衣と同様の苦しみに日々を過ごしていた頃である。父の慰めやいたわりを期待する甘えを、この女として持っていたに相違ない。しかし、裏切られたのである。ひょっとすると、あの女がその後苛烈を極める人格を形成していくきっかけは、これであったのかもしれない。

しかし、先帝急死、桐壺帝即位、そして弟宮（夫宮）が春宮と決まった瞬間に、右大臣は態度をがらりと変えた。即位の大嘗祭のときも、帝の外舅という顔で平然としていたそのうである。しかも翌年、弘徽殿女御は玉のような御子を生んだ。しかも実権を握っていた祖父が死んだ。後にはぬぐいがたい不信感だけが残った。そして、再び、例の「ご尊顔を押し奉り」という忙しい挨拶回りを始めたという次第である。兵部卿宮は右大臣にとってお荷物にすぎなくなつた。

「で、ございましょう。義娘までこしらえて後押しをしたのでございますから、舅として兵部卿宮（先帝一宮）の後見は右大臣がなさらなくてはなりませんまい」

「まさか。それでは一人で腕相撲をするようなものではありませんか」

「仕方ありませんまい。お上も食えぬお方でございます。藤壺と弘徽殿は後宮七殿五舎の双壁でございます。その両女御が後の座を争えば、その両方の経費が右大臣の懐からという

ことになりませぬ」

「それは豪儀なことですな。それに、もし藤壺女御が寵愛されて中宮（皇后）にでもなつたらどうするのでしょうか」

「元も子ありません。『風の種を蒔く者は風の収穫をする』と申しますから。弘徽殿ではいたくご機嫌が悪くていらつしゃって、父右大臣がお渡りになつても中に入れてはもらえないとか。（それはお気の毒なことですな）そのうちご自分のご実家の周りに鳥や鼠の死骸でもお並べになるのでは。（それしか能がないのか）お上も笑いが止まらぬことをごぞいませうね」

笑いが止まらないのは中将の君のようであった。

どうやら「瓜二つ」を言い出したのは源典侍らしかった。宮中に巢食う妖怪である。二十歳をすぎた女が子を産んでも馬鹿にされるのに、この妖怪は五十年近く現役の女をもつて任じている。どういうわけか歴代の帝が手放さないことから、一種の「色好みの殿堂」として、その名は隠れもない。当人は「公達の肝を一つ食らうと寿命が三月延びる」と豪語しているが、その「三月」という控えめな数字が不気味である。

「まあ似ていらしても決して不思議ではありません。従姉妹同士でございますから。源氏の君と藤壺女御もよく似ているとお上は仰せだそうでございますよ」

私はどうなのか。同じ血を引いているではないか。そう言いかけてやめた。

「殿方は妙なことに、好きになつた女の顔を忘れるものだそうですよ。愛しいと思つた瞬

間から、目で見るとやめるのでしょうか。好きなものはみんな同じに見えてくるという錬金術なのではないですか」

心にもない理屈をこねはじめた私は、さらに不機嫌になつた。帝が源典侍を使って噂を蒔いたのは目に見えている。私の嫉妬は、ときに恥じらいから、平気で論理のすり替えをする。「瓜二つ」などどうでもよいのである。本当は藤壺女御の持つ「禁止」がうらやましいだけである。桃苑式部卿宮の姫君のときもそうであった。平然とかの姫君がやってのけた「拒否」がうらやましかつたのである。「禁止」も「拒否」も、人一倍飽きっぽい源氏の君の憧憬を維持する効能を持つ。しかし、もはや私にはそれができない。

天竺のずっと西に不思議な神話がある。愛の神誕生の神話である。父親は「狩猟の神」であり、狙つた獲物はすべて手に入れる能力を持つ。母親は「貧困の神」であり、どんなものでも所有、維持することはできない。そんな母の下ではまともにも育つことはない。神々は案じたのか、その子は「美の女神」に育てられることとなつた。この結果、この子どもは育ての親の影響で美を求め、父親の遺伝でそれをいとも容易に獲得し、その母の遺伝で手に入れたものを直ちに失うという宿命を負つた。この子が愛の神となる。美しい女に焦がれ、苦勞もなくそれを我がものとし、そしてきつとすぐ飽きてしまうのであろう。愛の、ことに男の愛のあり方を明確に物語る神話である。

源氏の君はこの愛の神なのではないか。父桐壺帝は摂関家をうまく操縦し結局は権力も女も何でも手に入れるしたたかさを持っていた。母桐壺更衣は、名譽、富、地位、そして

ついに生命さえも失うという喪失の天才である。そして源氏の君に美を教えた継母は、いる。それが藤壺女御である。しかし藤壺女御は女神ではない。父が「現人神」であり、母が「仏」になっているのに対し、「女神」は生身の人間にすぎないのである。人間の女である以上は、犯せる。しかしもしそれが実現したらこの二人は確実に社会的に破滅する。それを防ぎこの神話を完成させるためには、ここにどうしてももう一人の登場人物が必要となる。それが、私ではないかと、密かにそう思うのである。

しかし私の心はこれを自身に対するごまかしだと気付いている。本当は心の底から藤壺女御を嫉妬しているのである。それでも、祖父の意志を私が継いでゆく以上、この女と源氏の君を守らなければならない。もしも二人が一線を越えてしまったら、間違いなく破滅が待っている。破滅させないためには、邪魔をするしかない。ここが嫌なところだが、政治的な事情で嫉妬が容認されるのである。

「とにかく藤壺の女房たちについて探りを入れなさい。右大臣のゆかりの者が入ってはいけません。お命に関わります。そういえば二条院もそう。源氏の君の方も同様に。少しのんびりしすぎてもいいかもしれません」

私は我に返ってから、中将の君にこまごまと命じた。やはり私は率直な女にはなれない。政治の世界に首をつっこむ方が、愛されたい女であるよりはずっと心地よい。なぜか、弘徽殿女御の悲しみが少しわかるような、そんな気がした。

この都は実は女の都である。表立った政争の舞台には登場して来ないものの、陰で無数

の女房たちが小さな実務をひとつひとつこなしていくことが勝利につながるのである。祖父に縁のある女房集団は代を重ねつつ未だ健在である。三つに分かれて生きている。一つは先帝后宮から藤壺に、一つは桐壺更衣から源氏の二条院に、一つはここ六条に。

もつとも、これらの女房たちの忠誠心など当てにできたものではない。人は当面の利害で動くものだが、この国の場合、利害の予感だけで動くというところがある。祖父の代からの摂関家の内紛においても、所詮は親戚同士の内輪揉めであるにもかかわらず、人々は風向きが変わる以前に、露骨に勝つ側になびいた。それを見てきて感じたことだが、将来もしもこの国が国ぐるみで敗北するような、そんなおとぎ話がありえたとしたら、賭けてもよいが日本人すべてが敵方に寝返ることは間違いない。

今、藤壺女御と源氏の君という星が現れて、風向きに小さな変化が見えている。そんな微妙な変化に上手に対応するのは、とても、私のような批判的で直截な女にはできないわざである。中将の君という、この家の女房たちの中でただ一人、雅とは縁遠い風采の女を常に側に置いてあるのは、魔よけ厄よけが目的ではない。

立ち読みSAMPLE
はここまで